

卓越大学院プログラム 令和4年度プログラム実施状況報告書

採択年度	令和元年度	整理番号	1902
機関名	千葉大学	全体責任者（学長）	中山 俊憲
プログラム責任者	山田 賢	プログラムコーディネーター	米村 千代
プログラム名称	アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

（プログラムの目的）

人文社会科学、とりわけ人文科学における大学院教育は、これまでは往々にして深い専門性の探求に基づく研究者養成のみに特化し、激動する現代社会の諸課題に柔軟に対応するためのイノベーション人材養成を中核的な課題として取り上げては来なかった。しかしながら、これまで以上に多様な背景を持った人々がグローバルに流動、接触し、それとともに発生する摩擦や軋轢もより複雑化しつつある現代世界において、むしろ多様な文化的背景や感性、変動する社会動態に分け入りながら、その中から課題解決の指針を示し、リーダーシップを発揮していくための新しい人文的学知はいまこそ必要である。社会実装に架橋するための人文的学知の刷新はただちに果たされるべきであり、本プログラムでは、人文科学の発想を基礎に据えながら、進化した Digital Humanities の方法を融合し、人間社会における未知の事態に対して指針を示し得る、刷新された人文的学知 Humanities Innovation に基づく大学院教育プログラムを臨床人文学という概念で位置づけることにする。本プログラムはかかる省察・構想に立脚しながら、現代社会の課題に対して、しなやかな文化的想像力と文理融合的な俯瞰的学知に基づいて多様な存在と協働し、ダイバーシティ社会を主導していくトップマネジメント人材を養成する。（調書P.5）

（大学の改革構想）

学長のリーダーシップのもとに、現在における改革構想を千葉大学Visionとしてまとめている。本申請プログラムが同Vision に緊密に関わる点を示せば、以下の通りである。

Global：千葉大学では国際社会で活躍できる次世代型人材の育成を重要な教育目標として定めている。具体的には、スーパーグローバル大学創成支援事業の確実な推進、全学の国際化教育を牽引するパイロット学部としての国際教養学部の新設、全学的司令塔としての国際未来教育基幹の創設による世界水準の教育実践、その一環としての海外キャンパス（「千葉大学バンコク・キャンパス」）の設置などを通じた人材育成を実践している。

Research：千葉大学では、人文社会科学系・自然科学系・生命科学系の大きな三つの学問領域が、それぞれ独創的で高度な研究拠点を有する「トリプルピーク チャレンジ」（研究三峰）を実現すべく、戦略的研究支援を行っている。一方それと同時に、それら「三峰」を横断的に貫く文理の枠を超えた融合型研究を推進しており、全学から分野を超えて糾合されたAI 研究会も、「千葉大学モデル」データサイエンス教育も、将来の融合を見据えた戦略的基盤整備である。

Innovation：産学連携の強化、研究成果の社会実装を強力に推進する。平成29年度には9社に及ぶ企業と包括的連携協定を結んでいる。

本申請プログラムは、以上のような千葉大学のVisionを継承し発展させるものとして位置づけられる。

国際教養学部の新設、派遣留学生数の国立大学トップ（平成23、24、25、26、28年度）など、主として学士課程教育については、国際化教育は顕著な成果を上げている。次のステップは、国際未来教育基幹を司令塔としながら、全学の大学院教育にその成果を持ち上げて、大学院教育課程の中に高度グローバル人材育成のための共通の仕組みをビルトインすることである。また、本年度より、文理大学院を横断的に貫く「大学院共通教育」の中に「データサイエンス」科目を設置したが、これもまた高大接続から学部教育にまで一貫するデータサイエンス教育を、大学院教育に相応しい文理学融的高度教養教育として位置づけていく試みである。

以上のように、本申請プログラムは、千葉大学全体の改革を構想するVisionに寄り添うものでありながら、そこで試されたパイロットプログラムを、再び全学の文理融合的研究構想、横断的大学院改革構想に向けてフィードバックし、波及的に拡張していく起点としても機能する。（調書P.20）

2. プログラムの進捗状況

令和4年度はアフター・コロナの状況下において、プログラムを担う連携大学間の交流、企業等外部団体との交流、海外大学・海外拠点との交流が大きく進展し、本プログラムの次の発展に向けた基礎を固めることができた。具体的には以下の通りである。

【実施・運営体制の構築状況】

1) 教員・研究員等の雇用：クロスポイントメント教員を雇用して企業との連携を強化したほか、若手研究者を特任研究員として雇用し、卓越大学院プログラム所属大学院生の修学を支援させるとともに、メンターとして配置した。また、国際高等研究基幹に学長特別補佐として新たに特任教授を採用し、本プログラムを含む人文社会科学における教育プログラムの一層の強化発展および学内外の連携強化に向けた体制整備を図った。

2) 卓越大学院大学間連絡協議会等：連携大学間においてプログラムの方向性を共有しつつ、カリキュラムや質保証、企業連携についての具体的な方針を検討するための「卓越大学院大学間連絡協議会」（5月13日、10月27日、3月27日）を開催したほか、対面とオンラインを併用した5大学プログラム担当教員懇談会（9月9日、11月11日、3月16日）を開催した。

3) 卓越大学院特別委員会：千葉大学においては卓越大学院特別委員会において、プログラム応募大学院生に対する書面・面接選抜（4月19日）、プログラム所属大学院生を対象とした特別研究費配分に関する書面審査（9月7日、11月21日）に関する審査を行うなど、学生の選抜、履修状況の管理、学生への経済的支援等を実施した。なお、こうした特別研究費の枠組みを利用することで、本プログラム全体として、卓越大学院プログラム所属大学院生が、アメリカ・ドイツ・モンゴル等海外において、自己企画型のフィールド・リサーチを実施した。

4) 優秀な学生の獲得：令和4年度はプログラムへの応募17名に対して12名を卓越大学院プログラムの大学院生として選抜した。令和2年度の応募10名、令和3年度の応募14名、そして令和4年度の応募17名と、応募者が毎年順調に増加する状況の中で選抜を実施しており、優秀な大学院生を獲得することができている。

5) 外部評価等：千葉大学のプログラム全体に対して助言・指導を行う第3回千葉統括会議（3月2日）を開催したほか、令和4年度には千葉県経営者協会に委嘱して、産業界の観点から本プログラムへの独自の外部評価を実施した（3月22日）。令和5年度以降は、千葉県経営者協会を中核としつつ、情報IT系企業の参画を得ながら、常設アドバイザリーボードによって、随時プログラムへの助言や勧告を受ける体制を構築する。

【構想・計画の進捗状況】

国内外との大学間連携、企業連携を深化、拡大することで、アジアユーラシアとDigital Humanitiesを中核とする本プログラムの構想・計画を進展さ

せることができた。

I. 大学間連携（国内）

1) 合同コロキウム開催（9月7日～9日）：令和3年度まではオンライン実施であった合同コロキウムを、令和4年度は、国立歴史民俗博物館、千葉大学で対面開催とした。歴史民俗博物館では所蔵資料を利用したデジタル・データ管理のワークショップを、千葉大学では研究内容のプレゼンテーションとディスカッションを実施した。

2) ハイブリッド形式による定期セミナーの開催：連携企業であるJTB総研研究員による観光関係データ解析のセミナーを、対面とオンラインのハイブリッド形式で連続開催し、データ解析の社会実装の実際と、ロール・モデルとしての企業研究員の業務について学ぶ連続セミナーを実施した（5月20日（この日は対面のみ、以下ハイブリッド）、9月21日、30日、10月28日、12月28日、1月13日）。また、千葉大学を訪問したインドネシア・アイルランガ大学日本研究科長 ヌヌック教授によるインドネシアの日本研究に関するセミナー（11月16日）、浙江工商大学日本研究科 張光新講師による中国の日本研究に関するセミナー（1月18日）を、ハイブリッド形式で開催した。

3) 共通ルーブリックの導入：学修成果の質保証のために、5大学共通のルーブリックを導入、令和4年度のゲート審査（博士前期課程修了者の審査）からこれを適用した。研究内容、外国語、研究領域に関わる基礎知識について5大学の卓越大学院プログラム担当者が共通の指標で評価を実施した上で、被評価者にフィードバックを行った。

4) 共通コンテンツの開発：アジアユーラシア研究のオンデマンド配信用中核的コンテンツとして、連携各大学のアジアユーラシア地域の研究者によるアジアユーラシア・フィールド研究入門シリーズを作成したほか、Digital Humanitiesについても、歴史民俗博物館・千葉大学・岡山大学を中心に、オンデマンド配信用コンテンツを作成している。

5) 共同シンポジウムの実施：本プログラムを広く社会的に周知するために、5大学大学間連絡協議会、5大学プログラム担当教員懇談会のディスカッションをもとに、シンポジウム「現代中国の変容と東アジア国際関係」を開催（3月7日）、千葉県経営者協会会長の開会挨拶、駐中国日本国大使の基調講演、ニッセイ基礎研究所研究員等のパネルディスカッションを、対面とオンラインのハイブリッド形式で実施、連携大学・連携企業等に配信した。

II. 大学間連携（海外）

1) 浙江工商大学：中国・浙江工商大学とはプログラム発足以来、オンラインによる交流を続けてきたが、対面基調による教育研究交流を実現するために、令和4年度には浙江工商大学東方語言与哲学学院から張光新講師を招聘し、対面とオンラインを併用する大学院生の交流会を開催した（1月18日）。また、江蘇東方語言与哲学学院院长によるオンデマンド講演を実施したほか、これらを基礎として日本研究・東アジア研究を共通テーマとする両校大学院生の学術討論会「卓越大学院日中青年研究者学術論壇」を開催した（3月17日）。

2) アイルランガ大学：令和4年度にはインドネシア・アイルランガ大学からヌヌック日本研究科長を千葉大学に迎えて、インドネシアの日本研究をテーマとする対面・オンライン併用型のセミナーを開催し、連携大学の大学院生ともオンラインによるディスカッションを行なった（11月16日）。

3) キングスカレッジロンドン：イギリス・キングスカレッジロンドンはDigital Humanities学部を有するなど、ヨーロッパにおけるDigital Humanities教育研究の中核的な拠点の一つであるが、令和4年度には千葉大学プログラム担当者小風助教がここを訪問し、Paul Spence上級講師と、令和5年度以降におけるDigital Humanities COIL プログラムの企画、ならびにPaul Spence上級講師による卓越大学院プログラム5大学に向けたオンライン講演の実施について協議を行なった。

4) マヒドン大学：タイ・マヒドン大学には千葉大学海外キャンパスが置かれているため、ここを拠点としてタイにおいて現地日本企業を訪問する海外インターンシップをコロナ禍以前に企画していたが、コロナ禍とともに中止をやむなくされていた。令和4年度にはマヒドン大学側の責任者、ならびに千葉銀行現地事務所と協議を行い、令和5年度におけるバンコクでの海外インターンシップの再開を決定した。

5) 南台科技大学：台湾・南台科技大学日本語学科では、卓越大学院プログラム院生を派遣して日本語・日本文化教育の実践に当たらせる海外インターンシップをコロナ禍以前に企画していたが、コロナ禍とともに中止をやむなくされていた。令和4年度の協議を経て、令和5年度における当該海外インターンシップの再開を決定した。

Ⅲ. 企業等外部団体とのネットワーク

1) 経済団体との交流：千葉県経営者協会、千葉県商工会議所連合会、成田市商工会議所等の経済団体と、人文社会系大学院における人材養成イメージやキャリアパスについて協議し、とくに日本経団連の地方組織である千葉県経営者協会および傘下の企業と恒常的に意見交換を行っている。令和4年度には共同研究を実施するためのマッチングを行うチャンネルを確保するために連携協定を締結した。この連携協定に基づいて紹介を受けた酒造業の飯沼本家とは、本プログラム所属大学院生が日本酒の味覚表現に関わる統計解析をテーマとする共同研究を実施することができた。

2) クロスアポイントメント教員の採用：本プログラムの連携企業の一つであるJTB総研から主席研究員を千葉大学クロスアポイントメント教員として迎え、オンデマンド授業の実施、プログラム運営への助言、ハイブリッド形式によるデータ解析の連続セミナー等を行った。

3) 連携の拡大：プログラム出発当初からの連携先に加えて、京葉銀行、ジェトロ・アジア経済研究所、千葉市観光協会などとの連携を進め、令和4年度にはジェトロ・アジア経済研究所によって提供される英語研修プログラム「グローバル能力開発演習」、千葉市観光協会によって提供される「地域インターンシップ」を開講することができた。また令和5年度には、京葉銀行によって提供される「キャリア・デベロップメントー未来ビジョン創出ワークショップ」の開講も決定している。さらに令和4年度には、日本総研、ニッセイ基礎研究所などのデータ解析・市場分析担当の企業研究所や、帝国データバンク、AdobeなどのIT・情報企業と連携に関する協議を開始した。これらの企業とは、5大学で共有するプレ・インターン・プログラムを構築することを企画し、連携先を拡大すると同時に、企業連携を教育プログラムとして整備することを予定している。

【令和4年度実績：大学院教育全体の改革への取組状況】

・本事業を通じた大学院教育全体の改革への取組状況及び次年度以降の見通しについて

1) 大学院教育全体の改革への取組状況：学長主導による次世代人材育成の司令塔として「未来医療教育研究機構」と「自然科学系教育研究機構」、「人文社会科学系教育研究機構」を設置し、分野や部局を超え新分野開拓と融合研究を展開すべく大学院改革を進め、大学院の3学府（医学薬学学府、融合理工学府、人文公共学府）を創設してきた。こうした基礎の上に、両プログラムで育まれた理念や教育体制を大学全体へ敷衍させ、全学レベルで大学院の教育と研究体制の改革を強力に推進している。具体的には、分野や部局の壁、文系と理系の枠を超えて「文系・理系統融合ローテーション演習」を開始するとともに、異なる2分野の教員が大学院生を指導する「複数教員指導制」をとり、大学院生がダブルメジャー相当の力を有して修了できる新しい大学院システムが構築されている。本学の教育の中核である「国際未来教育基幹」に加え、「国際高等研究基幹」と「全方位イノベーション創発センター」を新設し、修了生が活躍できる場として特任助教ポジションを大学独自予算で確保している。

さらに、千葉大学では新たに「情報・データサイエンス学府（博士後期課程）」の設置を計画しており、本プログラムもここにデータサイエンスを人間と社会に応用していくための授業科目を提供するほか、本プログラム所属大学院生もまた「情報・データサイエンス学府」開講科目を履修するなど、Digital Humanitiesの成果を全学的な取組として展開する。

2) 次年度以降の見通しについて：本プログラムと「革新医療創生CHIBA卓越大学院」との連携強化はもとより、「情報・データサイエンス学府」、「学術・イノベーション推進機構（IMO）」との連携を強化し、2つの卓越大学院プログラムと、情報・データサイエンス教育、イノベーション・産学連携を一体的に推進する大学院教育を構築する。また、人文社会科学系の本プログラムにおける固有の課題については、データ解析を扱う企業研究所やIT・情報企業などとの連携ネットワークを強化し、人文社会科学系博士人材における人材養成イメージとキャリアパスを広くステークホルダーに提示していく。